

# 在日朝鮮人文学の研究動向とディアスポラ概念

浮葉 正親

名古屋大学 日本語・日本文化論集 第20号 (抜刷)

名古屋大学留学生センター (2013年3月29日発行)

# 在日朝鮮人文学の研究動向とディアスポラ概念

浮 葉 正 親

## 要 旨

本稿は、韓国、欧米、日本における在日朝鮮人文学（以下、「在日文学」と略す）の研究動向を並列的に紹介し、それぞれの地域における研究の特色を抽出することで、将来の共同研究の可能性を提示することを目的にしている。

韓国では、1990年代から2000年代にかけて在日文学を「民族文学」として捉える国文学の分野での研究が盛んになった。その一方、日本文学の分野では2000年代後半から在日文学を「ディアスポラ文学」として捉え直す新しい動きが見られる。在日文学をディアスポラ文学として捉える視点は欧米でも共有されているが、欧米では柳美里など一部の作家の作品が紹介され始めたばかりである。日本における在日文学研究は過去5年間を見ても、資料の発掘や綿密な検証作業が行われているが、その成果は韓国や欧米での研究とほぼ接点がないまま行われているのが現状である。

今後の共同研究に向けて必要なのは、朝鮮語ではなくホスト国の言語（例えば、日本語）で作品が発表されることの意味を考え直すこと、また「ディアスポラ」概念を人の移動の経験を生き生きと描き出すことができるものに更新していくことである。

## キーワード

在日朝鮮人文学、在日文学、民族文学、ディアスポラ、  
ディアスポラ文学

## 目 次

1. はじめに
2. 韓国での研究動向
3. 欧米での研究動向
4. 日本での最近の研究動向
5. 課題と展望

### 1. はじめに

2012年11月10日、韓国の建国大学校で開催された国際シンポジウム「韓日両国の視座から読む『在日文学』」に発表者の一人として参加した。日本からはもう一人、愛知県在住の作家であり在日朝鮮人文学（以下、「在日文学」と略す）研究の第一人者である磯貝治良氏が参加し、「文学に見る〈在日〉の変遷とこれから」という基調講演を行った。磯貝氏の講演後、筆者が日本や欧米の在日文学の研究動向を紹介する「在日文学研究の動向と今後の課題」という発表を行い、その後、韓国の国文学の分野における在日文学研究の動向を紹介する尹頌雅氏（慶熙大学校）の「在日朝鮮人文学を『呼び込む』韓国文学の地形図」、さらに日本文学の分野における近年の動向を紹介した李漢正氏（祥明大学校）の「ディアスポラと『ザイニチ』文学」という発表が続いた。

全体としてこのシンポジウムのねらいは、日韓のこれまでの研究史を振り返り、今後の課題や展望を明らかにしようというものであった。シンポジウムの内容を詳しく紹介する余裕はないが、韓国における近年の在日文学研究の進展には目を見張るものがあり、大きな刺激を受けた。

そこで、本稿では、まずそのシンポジウムの韓国側の二人の発表内容を簡単にまとめることで韓国における研究動向を紹介した後、筆者が報告した欧米や日本での最近の研究動向を紹介する。最後に、世界的な視野で在日文学研究を進めるうえで何が必要となるのか、とくに日本と韓国の役割や共同研究の可能性についても考えていきたい。

## 2. 韓国での研究動向

(1) 国文学研究者による在日文学研究：「韓民族文学」としての在日文学  
尹頌雅によれば、韓国で在外コリアンの文学が注目されるようになったのは、1988年7月の「解禁措置」以来であるという。軍事政権下でそれまで禁じられていた越北作家の作品に対する研究が許され、在日文学についても、金達寿、李殷直、金石範、李恢成など、朝鮮総連傘下の団体で文学活動をした作家たちの作品が短期間に翻訳された。つまり、国文学者たちの在日文学研究の出発点には、韓国文学の外延を拡張し、究極的には南北と在外コリアンの文学を融合させる「韓民族文学」の構築を目指すねらいがあったという（尹頌雅2012: 45）。

冷戦の終結と中国やソ連との国交樹立は各地域に居住する在外コリアンとの接触を容易にした。1996年10月には、韓国現代文学100周年を記念して「韓民族文学者大会」が開催され、「世界の中の韓国文学と文学者」というシンポジウムが開かれた。ただし、海外からの出席者たちの「民族文学」に対する認識は一様ではなく、韓国文学を求心点として在外コリアンの文学を範疇化しようとした主催者側のもくろみは達成できなかったようである。この時の反省を活かして、その後、在外コリアンの文学をより実証的に理解、考察しようとする作業が持続的に行われるようになった。

その結果、洪起三（編）『在日韓国人文学』（ソル、2001）、金宗会（編）『北朝鮮文学の理解』シリーズ（全4巻、チョンドンコウル、1999～2007）および『韓民族文化圏の文学1・2』（国学資料院、2003・2006）、張師善『南北韓文学評論比較研究』（月印、2005）、張師善・ウジョンクォン『高麗人ディアスポラ文学研究』（月印、2005）が相次いで刊行された。

その後、在日文学については、崇実大学校共同研究チームが日本で朝鮮語で書かれた文学作品を集中的に調査・発掘し、その研究成果を韓承玉ほか『在日韓国人韓国語文学の民族文学的性格研究』（国学資料院、2007）、金学烈ほか『在日韓国人韓国語文学の展開様相と特徴研究』（国学資料院、2007）に発表し、また河相一『在日ディアスポラ詩文学の歴史的的理解』（昭明出版、2011）も刊行されている。これらの研究は、主に朝鮮総連系の団

体が発行する雑誌に発表された文学作品を対象にしており、許南麒、姜舜、金時鐘、金学烈、金里泊などの詩作品が主な研究対象となっている。

このように国文学研究者による在日文学研究が朝鮮語の作品に集中するのは、日本語に堪能な研究者が少ないためだけでなく、日本文学研究者の研究が日本語の作品にのみ偏り、朝鮮語の作品を無視していると考えているからでもある。尹頌雅は、二つの分野の研究者が作品の使用言語によって研究対象を分け合い、研究成果の交流がほとんどないことが問題だと指摘している。(以上、尹頌雅2012: 29-44)

## (2) 日本文学研究者による在日文学研究：「同胞文学」から「ディアスポラ文学」へ

一方、日本文学研究者による在日文学研究は1990年代から2000年代にかけて盛んになった。その背景には、柳美里、玄月、金城一紀という新しい世代の作家たちが芥川賞や直木賞を相次いで受賞した影響もある。この時期の研究を先導した李漢昌は「同胞文学」という言葉で在日文学を紹介し、先述した「韓民族文学」に包含されるものであると説明した。兪淑子『在日韓国人文学研究』（月印、2000）は、金達寿、金石範、李恢成、李良枝の小説に表れた「民族的正体性（アイデンティティ）」に関する論議を展開し、洪起三（編）『在日韓国人文学』（ソル、2001）では、「民族」よりも「母国」にルーツを持つ文学であるという捉え方が示された。

このような「民族文学」として在日文学を捉えようとする研究に対して、金煥基（編）『在日ディアスポラ文学』（セミ、2006）は「ディアスポラ」という概念を積極的に使用し、鷺沢萌や伊集院静など日本名作家についても言及しながら、新しい世代の在日文学の変化を「解体」という観点から説明しようとしている。在日文学に登場する在日朝鮮人は「民族」よりも「在日として生きる」ことを重視する傾向にあり、しばしばその「在日性」さえも解体された概念として形象化されるという。

李漢正によれば、2006年に徐京植『ディアスポラ紀行——追放された者の視線』（岩波書店、2005）が韓国語に翻訳されたことも、この用語が韓

国で市民権を得る契機になったという。在日朝鮮人である徐京植は日韓両国の国民国家体制や多数者である「国民」の同質性、それに伴う排他主義を少数者である〈ディアスポラ〉の視線で相対化していると李は指摘する(李漢正2012: 57)。2008年に刊行された李漢昌(編)『在日同胞文学とディアスポラ』(全3巻、J&C)は、当初は「ディアスポラ」という語をタイトルに冠する予定ではなかったが、出版社の要請でそうせざるを得なかったという。

2000年代後半、韓国でディアスポラ概念が受け入れられた背景には、韓国経済のグローバル化や海外移民の増加、また韓国社会の「多文化化」(日本でいう「国際化」)が進んだことがある。ディアスポラという概念は、過去の植民地支配による離散の記憶ばかりでなく、国家間の境界や民族の境界を越えて文化が交わり、新たな文化を創出するという現在進行形の現象にも関心を導いていく。(以上、李漢正2012: 55-67)

以上のように、韓国における在日文学の研究は、一方で在日文学を未完成の「民族文学」に回収しようとする国文学研究者の研究と、もう一方で「ディアスポラ文学」の視点から新たな研究方法を模索している日本文学研究者の研究が並立しているのが現状であるといえよう。

### 3. 欧米での研究動向

#### (1) ドイツ語圏

雑誌『社会文学』第26号(2007)で、ドイツ日本研究所の専任研究員である岩田=ワイケナント・クリスティーナ(Iwata-Weickgenannt, Kristina)は、ドイツ語圏と英語圏の研究事情を紹介している。

岩田=ワイケナントによれば、ドイツでは1995年、マシュー・ケーニヒスベルグ(Königsberg, Matthew)が『日本のコリアン・マイノリティの文学：同化とアイデンティティ探し (*Literatur der koreanischen Minderheit in Japan, Assimilation und Identitätsfindung*)』という著書を刊行している。同書では、李恢成、金鶴泳、李良枝、李起昇が主に取りあげられ、在日コリアンの同化とアイデンティティの模索が論じられ、在日文学を基本的に

ディアスポラ文学として規定したうえで、「繋がりとしてのディアスポラ」(李恢成)から「断絶としてのディアスポラ」(李良枝)へのシフトがみられると結論づけているという(岩田=ワイケナント2007: 218-19)。岩田=ワイケナント自身は2008年、『すべてが劇場? 在日コリアン作家・柳美里のジェンダーとエスニシティ (*Alles nur Theater? Gender und Ethnizität bei der japankoreanischen Autorin Yû Miri*)』という著書を刊行し、2010年には柳美里の『ゴールドラッシュ』をドイツ語に翻訳している(ドイツ日本研究所ホームページ [http://www.dijtokyo.org/default.php?page=person\\_detail.php&p\\_id=217&lang=ja#publications](http://www.dijtokyo.org/default.php?page=person_detail.php&p_id=217&lang=ja#publications) から)。

岩田=ワイケナントによれば、欧米では柳美里に対する研究が圧倒的に多く、李良枝に対する研究がそれに続く。金石範、玄月、李恢成、梁石日に関する研究もあるが、男性作家の中では金城一紀が映画『GO』(2001年公開)の影響で注目されることが多いという(岩田=ワイケナント前掲: 219)。

## (2) 英語圏

英語圏では、メリッサ・ウェンダー (Melissa Wender) が2005年に発表した『歴史としての嘆き: 在日コリアンの語り1965-2000 (*Lamentation as History: Narratives by Koreans in Japan 1965-2000*)』が唯一のまとまった研究書である。同書では、李恢成、金鶴泳、宗秋月、金蒼生、李良枝、柳美里が取りあげられ、文学作品のみならず、金嬉老裁判の弁護活動、日立の就職差別に対する反対闘争、指紋押捺拒否運動や地方参政権をもとめる運動など、在日コリアンの政治運動も分析の対象となっている。在日コリアンの文学作品はそのような政治的な現実を背景にして生まれたものとして理解されているようである。

ウェンダーによれば、英語圏では、すでに李恢成「砧を打つ女」(1986年翻訳)、李良枝「由熙」(1991年翻訳)、宗秋月「名前」「遺言」「まぼろしのふるさと」「貼子哀史」(1995年翻訳)が翻訳され(Wender 2010: 223)、2010年、ウェンダーが編集したアンソロジー『光の中に (*Into the*

Light)』が刊行された。同書には、金史良「光の中に」、金達寿「富士の見える村で」、野口赫宙「異俗の夫」、金鶴泳「凍える口」、宗秋月「わが愛する朝鮮の女たち」「遺言」「名前」、李良枝「刻」、金蒼生「紅い実」、柳美里「フルハウス」が収録されている。これにより、植民地時代から現在に至る在日朝鮮人文学の流れをある程度トレースできるようになったのではないと思われる。また、巻末の文献案内も欧米での研究動向を知るうえで便利である。

### (3) フランス語圏

フランス語圏については、リヨン大学の細井綾女准教授に事情を尋ねた。フランス語に翻訳された在日文学の作品は、梁石日『血と骨』(2011年翻訳)、金石範『鴉の死』(詳細不明)、柳美里『フルハウス』(1997年翻訳)、『水辺のゆりかご』(2000年翻訳)、『ゴールドラッシュ』(2001年翻訳)、『石に泳ぐ魚』(2005年翻訳)である。ただし、柳美里の作品も現在は入手が困難であり、在日文学に対する認知度は低いという。また、フランスでも映画「GO」は人気があり、フランス語字幕の入ったDVDが出回っている。

研究面では、梁石日をマグレブ系仏語文学との比較から分析した論文で学位を取得した細井氏以外に、3名の日本人研究者が在日文学の研究会を立ち上げたばかりであり、2012年12月、その4名が日本研究の全国大会でパネル発表をしたという。発表タイトルは以下の通りである。「在日朝鮮人作家と母語の問題」、「柳美里／向日葵の棺」、「金鶴泳、梁石日、柳美里／父権の失墜」、「金蒼生、宗秋月の母親像」。

以上、欧米での研究動向を簡単に紹介した。岩田＝ワイケナントが指摘する通り、欧米では在日文学をディアスポラ文学としてとらえ、例えばドイツにおけるトルコ系移民やフランスにおけるマグレブ系移民の文学と対置されて理解されるようである。

欧米で在日コリアンがディアスポラとして認識されやすいのは、朝鮮大出校出身の在日コリアンであり、イギリス留学を経て現在はアメリカで教鞭をとっている人類学者ソニア・リャン (Sonia, Ryang) の一連の著作(日



本では、『コリアン・ディアスポラ 在日朝鮮人とアイデンティティ』が2005年に明石書店から出版されている)の影響もあるのではなかろうか。リャンは、最初の著作である *North Koreans in Japan: Language, Ideology, and Identity* (1997) から最近の *Writing Selves in Diaspora: Ethnography of Autobiographics of Korean Women in Japan and the United States* (2008) や *Diaspora without Homeland: Being Korean in Japan* (2009) に至るまで、在日コリアンを「ホームレス」(故郷喪失者)として規定しており、その傾向はますます強まっているように思われる。

また、ヤン・ヨンヒのドキュメンタリー映画「ディア・ピョンヤン」(2006年公開)の影響も少なくないだろう。「GO」にしろ、「パッチギ」(2004年公開)にしろ、朝鮮学校やその出身者という「北朝鮮」につながるイメージが濃厚であり、登場人物の「ディアスポラ」性が伝わりやすいように思われる。

欧米における在日文学研究の傾向としては、柳美里、李良枝、宗秋月という女性作家・詩人が取りあげられることが多いこと、さらに付け加えるなら、研究者の多くが日本研究者であることである。

#### 4. 日本での最近の研究動向

##### (1) ギンダレ研究会の成果

過去5年間の在日文学研究のなかでもっとも注目されるのは、ギンダレ研究会編『「在日」と50年代文化運動』(2010)である。宇野田尚也や細見和之らが中心となった同研究会は、それまで幻の雑誌といわれていた『ギンダレ』『カリオン』を発掘して不二出版から復刻・出版し(2008)、雑誌を丹念に読み進めながら、中心となった金時鐘、鄭仁、梁石日から貴重な証言を引き出すとともに、数多くの無名詩人たちの作品にも光を当てている。同書は、2009年5月、大阪文学学校で開催されたシンポジウム「いま『ギンダレ』『カリオン』をどう読むか」の記録と関係するエッセイと資料を加えて編まれたものである。同書は、民族団体の傘下にあった在日朝鮮人の雑誌を、近年研究が盛んになっている1950年代のサークル詩運動[例え

ば、鳥羽耕史『1950年代「記録」の時代』（2010）や雑誌『社会文学』第33号・特集「1950年代文学の可能性を探る——1955年体制が創り出したもの／隠したもの」（2011）などを参照のこと］の広がりの中に位置づけようとしている点で画期的である。

## （2）金時鐘研究の深化

次に指摘したいのは、金時鐘研究の深化である。細見和之は『ディアスポラを生きる詩人 金時鐘』（2011）の「あとがき」で、同じヂンダレ研究会のメンバーであった浅見洋子の研究に大きな示唆を受けたことを告白している。とくに、1960年代初頭に出版の計画が頓挫し四散してしまった金時鐘の詩集を再現する試み〔浅見洋子「金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（上）——記憶を語ることの歴史性」（2012a）および「金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論（下）——猪飼野の風景と民衆」（2012b）〕は、『地平線』（1955）、『日本風土記』（1957）から長編詩『新潟』（1970）に至る金時鐘の空白期を埋める貴重な作業の成果である。

一方、呉世宗『リズムと抒情の詩学 金時鐘と「短歌的抒情の否定」』（2010）も細見や浅見とはまったく別の方法論で長編詩『新潟』の解説を試みている。呉は金時鐘の「短歌的抒情の否定」という概念に徹底的にこだわり、それを丹念に検証する。その延長線上で「道」「変身」「意志」というキーワードを見出し、「自己変容を通じた世界の開示」という金時鐘の詩表現の原理を抽出している。

## （3）金石範研究の展開

金石範についても、青山学院大学文学部日本文学科編『異郷の日本語』（2009）と金石範（聞き手：安達史人・内田亜里・児玉幹夫）『金石範《火山島》小説世界を語る！ 在日と日本人／政治と文学をめぐる物語』（2010）が注目される。

『異郷の日本語』は、2007年9月、青山学院大学で開催された「もう一つの日本語」というタイトルのシンポジウムの記録である。金石範の「文

学的想像力と普遍性」という講演と他の報告者を交えた討議の内容が収録されている。佐藤泉の解説「非場所の日本語 朝鮮・台湾・金石範の済州」では、金石範がかつて『ことばの呪縛』(1972)等で突き詰めようとした、在日朝鮮人が日本語で書くことの意味を「翻訳の思想」という概念で捉え直そうとしている。

この佐藤の論考に触発された立花涼は、ジャック・デリダなどを引用しながら、「金石範の「民族主義」なるものについてもその表象の同一性に惑わされることなく、70年前後から約半世紀を経てそこにかがわれる反復される同一性だけでなく確かな差異をも見定めるべくテキストを新たな読みにさらさなくてはならない」(立花2010: 17)、と更なる探求の必要性を指摘している。

一方、『金石範《火山島》小説世界を語る！ 在日と日本人／政治と文学をめぐる物語』は、三人のインタビュアーが『火山島』の作品世界に数多くの問を發し、それに金石範が答える形式で構成されている。効果的なモノクロの写真と随所に新たな読解の可能性を感じさせる対話が散りばめられており、今後『火山島』研究の入門書として有用なテキストになるかもしれない。

#### (4) その他

宋恵媛「在日朝鮮人詩人姜舜論——その生涯と詩作をめぐって」(2011)および「在日朝鮮一世女性と文学——植民地以後の女たちの移動とエクリチュールをめぐる考察」(2012)は、これまであまり注目されなかった朝鮮語の作品をも研究対象に取りあげ、丹念な検証を試みている。宋恵媛氏は、「在日朝鮮人文学の歴史——1945年—1970年」と題する学位論文を一橋大学に提出しており、在日朝鮮人文学の形成史に関する精緻な研究成果の発表が期待される研究者である。

立花涼『ポスト構造主義物語論 玄月「眷族」をめぐる思考のエチカ』(2009)は、そのタイトルが示す通り、ポスト構造主義という、これまでの在日文学研究にはない方法論で玄月の『眷族』を解説するユニークな著

作である。ここではその内容には踏み込まないが、もし同書が欧米の言語で翻訳されるなら、注目を集めるのではなかろうか。

最後に、拙著『社会参加としての在日朝鮮人文学——磯貝治良とその文学サークルの活動を通して』(2012)についても簡単に紹介させていただく。同書は、在日文学研究の第一人者として知られる磯貝治良の作家としての側面に焦点を当てたものである。新日本文学会を主な活動拠点とした磯貝が在日朝鮮人文学に出会い、「在日朝鮮人作家を読む会」(1977年結成、現在も月例会を開催し、同人誌『架橋』を発行している)を立ち上げるまで、1960年代から1980年前後までに磯貝が発表した小説や評論、磯貝の発表作品一覧、在日朝鮮人作家を読む会の活動記録(1997年～2011年)、同会の文芸誌『架橋』バックナンバー(創刊号から第26号まで)を電子化してホームページに公開している(「ジローの文学マダン」<https://www.isojiro-yomukai.com/>)。

## 5. 課題と展望

以上、韓国、欧米、日本の在日文学研究の動向を紹介してきた。

まず気がつくのは、欧米での研究はまだ始まったばかりであり、柳美里以外の代表的な作家の作品がほとんど読まれていないことである。次に、欧米と韓国での研究が「ディアスポラ」概念を積極的に受容しているのに対し、日本ではそれがほとんど意識されていないことである。また、朝鮮語で書かれた作品に注目しているのは韓国だけであり、欧米や日本では在日文学は「日本語文学」という視点で捉えられていることにも気づく。

以下、世界各地の研究者がお互いの研究成果を交流するために何が必要か、ここでは、(1)「日本語文学」として在日文学を捉えることの意味、(2)在日文学をディアスポラ文学と捉えるために留意しなければならないこと、の2点を今後の課題および展望として示しておきたい。

## (1) 「日本語文学」としての在日文学

前節で紹介した通り、近年の日本における在日文学研究は新たな資料発掘が進み、ますます精緻化する傾向にある。しかし、その成果が海外の研究者の手元に届き、問題意識が共有されるにはさまざまな障壁があるように思われる。

おそらく海外の研究者にとって（もちろん、日本で研究をする「非在日」研究者にとっても）もっとも難しいのは、在日朝鮮人の移動の経験やその歴史性をリアルに感じることであろう。植民地からの解放後も宗主国に残ることを選んだ在日朝鮮人をポストコロニアリズムの理論で分析することは可能であっても、在日コリアンの特殊性を析出するためには、少なくとも日本の戦後史と朝鮮半島に生まれた二つの国との関係に対する幅広い知識が必要になる。その点、先述したメリッサ・ウエンダー『歴史としての嘆き：在日コリアンの語り1965-2000』はきわめて誠実な著作であるといえる。

海外の研究者にとって、在日文学は日本と朝鮮半島との関係を知る窓口である。そして、在日文学が「日本語文学」であるという前提から、日本語を読むことのできる日本研究者が担い手になることが多い。

上記の研究動向では紹介できなかったが、フェイ・ユエン・クリーマン「戦後の日本語文学——在外日本人作家・在日外国人作家を中心に」（2006）は、戦後の日本語文学を大きく二つのカテゴリーに分けている。一つは、在日文学や『台湾万葉集』などを含む植民地の遺産としての日本語文学であり、もう一つは、水村美苗やリービ英雄のように日本語文学の未来を予感させる文学である。クリーマンが注目するのは作家とその使用言語との関係であり、作家が日本語で書くことを慎重に意識的に選択したことである（クリーマン2006: 120）。

すでに紹介した通り、近年韓国では、在日文学を「ディアスポラ文学」として注目しているが、その場合、在米コリアンや中国朝鮮族の文学と比較研究されることが多いのではないかと思われる。その場合、重視されるのは作家の民族性（エスニシティ）であり、使用言語は補助的なものとし

て扱われるだろう。そして、その傾向は在日文学の韓国語への翻訳が進めばさらに強くなるであろう。現在では、国文学研究者が朝鮮語の作品を、日本文学研究者が日本語の作品を研究対象とする構図がみられるが、日本語の作品の韓国語への翻訳がさらに進めば、それらを「民族文学」に回収しようとする動きはさらに強まるだろう。何らかの事情で故郷を離れざるを得なかった作家が創造・表現の手段としてホスト国の言語を選んだことを、韓国の研究者はもっと意識していいのではなかろうか。

## (2) 在日文学=ディアスポラ文学なのか

果たして、在日朝鮮人は「ディアスポラ」であり、在日文学は「ディアスポラ文学」なのだろうか？

徐京植は『ディアスポラ紀行——追放された者の視線』（2005）で、ディアスポラを次のように定義している。「近代の奴隷貿易、植民地支配、地域紛争や世界戦争、市場経済グローバリズムなど、何らかの外的な理由によって、多くの場合暴力的に、自らが本来属していた共同体から離散することを余儀なくされた人々、その末裔」（徐2005: 2）。この包括的な定義に在日コリアンが含まれることは明白であるが、問題は、「その末裔」がいつまで「ディアスポラ」なのか、という点である。

磯貝治良は三世以降の新しい世代は「<sup>ね</sup>根<sup>お</sup>生いの存在」になりつつあると指摘する。つまり、彼らは日本の社会にしっかりと根をおろした存在であるというのである。この場合、注意しなければならないのは、この「根生い」が日本人への完全な同化を意味するのではなく、あくまでも〈在日〉を生きる存在であるという点である。彼らは「民族アイデンティティに安住できず、多様なアイデンティティ（アイデンティティの雑種性）を探しあぐねて、苦闘しているのだ」と磯貝は指摘する（磯貝2009: 64）。

例えば、三世の李建志は『日韓ナショナリズムの解体「複数のアイデンティティ」を生きる思想』（2008）で、自分は「明らかに日本と朝鮮半島（の文化）の双方に連なる人間である」といい、自分のような「複数のアイデンティティを持つひと」はそうでないひと（マジョリティ）の「無意

識で善意のナショナリズム」にさらされ、選択を迫られたり、忠誠心を試されたりするのだという。例えば、「帰化するか、現状に満足するか、それがいやならばお国に帰るか、それはあなたの自由だ。」と（李2008: 26-28、傍点・著者）。

また、二世の徐京植は先に触れた著書のプロローグで、在日朝鮮人とは何かを説明しながら、「ここまで読んでくれた読者は、「やっぱり、ややこしい」と溜め息をついているかもしれない。しかし、このややこしい状態をつくり出した第一の責任は日本国にあるのだ。そして、このややこしさを解きほぐして理解することは、当の在日朝鮮人にとってもきわめて困難である。そのため、多くの在日朝鮮人は、どういう由来で、どんな構造によって、自らのアイデンティティが分裂しているのかを了解することができず、たえず漠たる不安と緊張を強いられている」（徐2005: 17、傍点・著者）と述懐している。

このように世代の違う二人の独白を並べると、二世の徐京植が感じた「ややこしさ」は、三世の李建志の世代になっても解消されていないばかりか、かえって拗れてしまっているように思われる。それは、在日コリアン側の問題というよりも、彼らがすでに「根生い」の存在になっていることを認めようとせず、彼らに絶えず説明を求め、選択を迫るホスト国日本の国のあり方の問題でもある。

ロジャーズ・ブルーベーカーによれば、ディアスポラの構成要素の核となる基準は、(1) 離散、(2) 郷土（<sup>ホームランド</sup>現実のあるいは想像上のもの）志向、(3) 境界の維持、である。最後の「境界」は、「自らに課した族内婚や他の自己隔離の諸形態あるいは社会的排除による意図せざる結果などを通じた、同化に対する周到な抵抗によって維持されうる」が、異種混淆化やクレオール化などによる浸食と緊張関係にある（ブルーベーカー2009: 385）という。

上の三つの基準を踏まえるなら、先述の李建志の独白は、日本人と朝鮮人、日本社会と在日コリアン社会の境界がいまだに維持されていることに対するいらだちを表明し、その境界を積極的に浸食しようとする意志の表

れだと解釈することができる。また、磯貝が在日コリアンの新しい世代を「根生い」の存在だと規定するのは、日本人と朝鮮人の間に境界があることを認めた上で、それを浸食しようとしているのではないかと考えられる。このように考えれば、磯貝の〈在日〉文学論もディアスポラ文学論の枠組みで説明できるのではないと思われる。

結論として言いたいのは、在日文学をただ単に「ディアスポラ文学」と言い換えるだけでは何の意味がないということである。在日文学をそう呼ぶことで、どのような問題を提起しようとしているのかをもっと明示的に語るべきである。また日本や韓国だけでなく、海外の研究成果をも視野に入れ、われわれが日本でまた韓国で行っている研究が世界の在日文学研究の発展にどのような寄与をするのかということをもっと真剣に議論するべきではなかろうか。

ディアスポラ概念やその研究史をまとめた戴エイカは、「境界を越えながらも境界に引き続き絡めとられている、こうした人の移動の経験を分析する大切な研究概念の一つとして、ディアスポラ概念は、現在まさしく必要とされており、「ディアスポラ研究とは、人の移動の「経験」を中心にすえ、それに伴うアイデンティティや文化の変容を植民地主義、国民国家主義、資本主義などの歴史的経験と結びつけて分析することである」(戴 2009: 72-73) と指摘する。

韓国(および朝鮮民主主義人民共和国)は在日文学の「<sup>ホームランド</sup>郷土」であり、日本はそこから「離散」した作家たちが活躍した場所である。日本人と朝鮮人の「境界」はどのように形成され、維持されて来たのか。そして、その「境界」を浸食しようとするどのような営為が行われて来たのか。さらなる共同研究の必要を感じてならない。

## 謝辞

シンポジウムでの発表の機会を与えてくださり、韓国滞在中もさまざまな便宜をはかってくださった、建国大学校師範大学の朴鐘明先生はじめ日本語教育学科の先生方、また討論者としての的確なコメントを賜った尹相仁



先生（ソウル大学校）、金煥基先生（東国大学校）にこの場を借りて謝意を表したい。

## 参考文献

（日本語）

- 赤尾光春・早尾貴紀編(2009)『ディアスポラから世界を読む 離散を架橋するために』  
明石書店
- 浅見洋子(2012a)「金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(上)——記憶を語ることの歴史性」『百舌鳥国文』第23号、大阪府立大学言語文化学会、53-82頁
- 浅見洋子(2012b)「金時鐘・幻の第三詩集『日本風土記Ⅱ』論(下)——猪飼野の風景と民衆」『言語文化学研究(日本語日本文学篇)』第7号、大阪府立大学人間社会学部言語文化学科、1-34頁
- 青山学院大学文学部日本文学科編(2009)『異郷の日本語』社会評論社
- 磯貝治良(2007)「変容と継承——〈在日文学〉の六十年」『社会文学』第26号、社会文学会、32-46頁
- 磯貝治良(2009)「大討論「浮遊する在日コリアン」終便」『架橋』第28号、在日朝鮮人作家を読む会、64頁
- 岩田=ワイケナント・クリスティーナ(2007)「海外の「在日」文学の研究事情——ドイツ語圏と英語圏の場合」『社会文学』第26号、社会文学会、218-224頁
- 浮葉正親(2012)『社会参加としての在日朝鮮人文学——磯貝治良とその文学サークルの活動を通して』名古屋大学(科学研究費補助金挑戦的萌芽研究研究成果報告書)
- 呉世宗『リズムと抒情の詩学 金時鐘と「短歌的抒情の否定」』生活書房(2010)
- 金石範(聞き手:安達史人・内田亜里・児玉幹夫)(2010)『金石範《火山島》小説 世界を語る! 在日と日本人/政治と文学をめぐる物語』右文書院
- 川村湊(2007)「分断から離散へ——「在日朝鮮人文学」の行方」『社会文学』第26号、社会文学会、25-31頁
- 徐京植(2005)『ディアスポラ紀行——追放された者のまなざし』岩波書店
- ソニア・リャン(訳・中西恭子)(2005)『コリアン・ディアスポラ 在日朝鮮人とアイデンティティ』明石書店
- 末恵媛(2011)「在日朝鮮人詩人姜舜論——その生涯と詩作をめぐる」『朝鮮学報』第219号、朝鮮学会、155-99頁

- 宋恵媛 (2012) 「在日朝鮮一世女性と文学——植民地以後の女たちの移動とエクリチュールをめぐる考察」『朝鮮学報』第223号、朝鮮学会、71-110頁
- 戴エイカ (2009) 「ディアスポラ——拡散する用法と研究概念としての可能性」野口道彦・戴エイカ・島和博『批判的ディアスポラ論とマイノリティ』明石書店、15-90頁
- 立花涼 (2009) 『ポスト構造主義物語論 玄月「眷族」をめぐる思考のエチカ』新幹社
- 立花涼 (2010) 「翻訳の思想 佐藤泉の金石範論への応答」『架橋』第29号、在日朝鮮人作家を読む会、3-27頁
- デンダレ研究会編 (2010) 『「在日」と50年代文化運動』人文書院
- 鳥羽耕史 (2010) 『1950年代「記録」の時代』河出ブックス
- フェイ・ユエン・クリーマン (訳・末岡麻衣子) (2006) 「戦後の日本語文学——在外日本人作家・在日外国人作家を中心に」『岩波講座「帝国」日本の学知 第5巻 東アジアの文学・言語空間』岩波書店、105-161頁
- 細見和之 (2011) 『ディアスポラを生きる詩人 金時鐘』岩波書店
- 洪貴義 (聞き手:早尾貴紀) (2009) 「否定の民族主義のゆくえ——在日朝鮮人とディアスポラ」赤尾・早尾編 (2009)、321-50頁
- 李建志 (2008) 『日韓ナショナリズムの解体「複数のアイデンティティ」を生きる思想』筑摩書房
- ロジャーズ・ブルーベーカー (訳・赤尾光春) (2009) 「「ディアスポラ」のディアスポラ」赤尾・早尾編 (2009)、375-400頁
- (韓国語文献)
- 李漢正 (2012) 「ディアスポラと‘ザイニチ’文学」『第9回学術シンポジウム 韓日両国の視座から読む‘在日文学’ (予稿集)』建国大日語教育科・大学院日本文化言語学科、韓国・ソウル、55-67頁
- 尹頌雅 (2012) 「在日朝鮮人文学を‘呼び込む’韓国文学の地形図」『第9回学術シンポジウム 韓日両国の視座から読む‘在日文学’ (予稿集)』建国大日語教育科・大学院日本文化言語学科、韓国・ソウル、29-44頁
- (英語文献)
- Ryang, Sonia ed. (2009), *Diaspora without Homeland: Being Korean in Japan*, University of California Press
- Wender, Melissa L. (2005), *Lamentation as History: Narratives by Koreans in Japan 1965-*

2000, Stanford Univ Press.

Wender, Melissa L. ed. (2010), *Into the Light: An Anthology of Literature by Koreans in Japan*, Honolulu, University of Hawaii Press.

(うきば まさちか・准教授)